

太平洋戦争中、県人数百人を含む約2800人が乗船した旧日本陸軍の輸送船「日連丸」が、北海道釧路沖で米潜水艦の攻撃を受け沈没してから、16日で82年となる。長岡出身で、犠牲者のひ孫に当たる江戸川大学(千

葉県流山市) 4年田辺里穂子さん(21)は、日連丸事件を題材にした卒業論文を執筆した。犠牲者の遺族にインタビューし「悲惨な出来事を伝えてほしいという強い思いを受け取った」と語る。

日連丸の悲劇語り継いで

長岡出身 犠牲者のひ孫が大学で卒論

日連丸は1944年に沈没し、約2800人が死亡した。事件は軍事機密とされ、生存者や遺族は長い間、事実を知らされなかった。

犠牲者の一人で、田辺さんの父方の曾祖父である新一郎さんは、高柳町(現柏崎市高柳地域)の出身。本県出身者を中心に構成された第4野戦病院の衛生兵として乗船し、24歳で帰らぬ人となった。

田辺さんは幼い頃から祖母の家で、仏壇にあつた新一郎さんの遺影や日記について考察した。

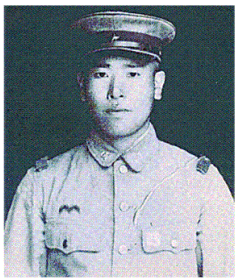


日連丸事件の犠牲者のひ孫で、事件を題材に卒業論文を執筆した田辺里穂子さん。長岡市千歳1の新潟日報長岡支社

遺族へ取材、思いに触れ 北海道の図書館で公開

調査や執筆は25年8月から12月にかけて行った。文献や過去の報道で初めて事件の詳細に触れ、「遠くない昔に沈没の事実が隠され、遺族に知らされない出来事があったことに胸が痛む。曾祖父が乗っていたと思うと、リアルさが増した」と振り返る。

10月には、犠牲者の遺族3組にインタビューした。軍医だった父親を亡くした新潟市出身の山口恵子さん(67)は、23年に亡くなった姉と共に父親の情報を求めて動いたことを聞き取った。山口さんの姉が新潟日報に手紙を送り、戦後40年近く明らかになつていなかった事



故・田辺新一郎さん

件を伝える1988年8月の記事につながったことなども知った。

「遺族が積極的に動いたことでいろいろ分かっていった。行動力に驚かされた」。しかし、関係者が高齢となり、日連丸の全国の遺族をつくる「日連丸慰霊の会」は現在、約40人しかいない。遺族だけで語り継ぐのは難しく、戦争教育や地域で語り継ぐ必要性と、メディアが伝える役割の大きさを感じたという。書き上げた卒論は慰霊の会の会員に届けた。日連丸事件の資料を収蔵する厚岸町の図書館で保存、公開されることも決まった。「多くの人に読んでもらえ、書いて良かった」と喜ぶ。

4月から民放キー局の関連会社に入社し、報道番組の制作に携わる。「いつか自分が企画を持ったら、戦争をテーマにしてみたい。誰かの心に訴えるような情報を伝える仕事をしたい」と今後の目標を語った。

日連丸事件 1944年3月16日夜、北海道・釧路港を出港して千島列島のウルップ島に向かっていた旧日本陸軍の輸送船「日連丸」が、釧路沖で米潜水艦の攻撃を受けて沈没し、約2800人が死亡した事件。乗船者は本県、宮城県、福島

県の出身者が中心で、45人の生存者は北海道厚岸町で手当てを受けた。沈没は軍事機密として隠され、約40年後に遺族や生存者らの調査で明らかになった。県内では88年8月14日の新潟日報の記事を通じ、初めて事実を知った遺族が多かった。